

Title	肉体の復活：『チャタリー夫人の恋人』
Author(s)	奥村, 透
Citation	英文学評論 (1973), 30: 51-63
Issue Date	1973-03
URL	https://doi.org/10.14989/RevEL_30_51
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

肉体の復活

『チャタリー夫人の恋人』

奥村透

我々のは本質的に悲劇的な時代である。だから我々はそれを悲劇的にとらえることを拒む。大変動が起った。我々は破壊のなかにいる。我々は新しいささやかな住居を建て、新しいささやかな希望を持ち始める。それはどちらかといえば困難な仕事である。今や未来に通ずる滑らかな道はない。しかし我々は迂回し、障害をこえてよじ登る。我々は生きねばならない。たとえいかに多くの天が降ってこようとも^①。

これはきわめて暗示的な、この小説の冒頭の一節である。現代に生きることがいかに困難であり、破滅的であるかということ、この一節は示している。現代は機械が人間を支配する時代であり、人間は金の奴隷となつて、真の人間性を失つて、蛆虫のごとくうごめいている時代である。チャタリー夫人コンスタンス (Lady Constance Charterley) が生きた時代もそうした時代であつた。

彼女と夫のクリフォード (Sir Clifford Charterley) の住む中部イングランドのラグビー (Ragby) 邸には、炭鉱町ティヴァーシャル (Tewershall) の機械の音が聞こえ、炭塵が風によつて飛んで来た。

ラグビー邸のやや陰うつな部屋から、彼女は炭鉱のふるいのガタガタ鳴る音、巻揚げエンジンの鳴る音、転轍する貨車のカチカチいう音、炭鉱蒸気機関車のしゃがれた小さい警笛の音を聞いた。ティヴァーシャルの鉱口は燃えていた。何年も燃えつづけていた。それを消すには数千ポンドの金が要るであろう。だからそれは燃えねばならなかった。そしてそれはしばしばの事なのだが、風がその方向に吹くと、家はこの大地の排泄物の、硫黄のような燃焼の悪臭でいっぱいだった。だが風のない日ですら、空気はいつもなにか地下の臭いがした。硫黄、鉄、石炭、あるいは酸。そしてクリスマスのぼらにさえ、煤がしつこく、信じがたく、運命の空から降る黒いマナのように、たまるのであった。

そしてそこに住む人間は、

田舎のようにやつれ、醜く、佻びしく、そっけなかった。ただ彼等の訛りの深い不鮮明な音、群をなしてアスファルトの上をぞろぞろ家路を帰ってゆく、鉄をうった炭鉱靴のサクサクいう音には、なにか恐しい、そして少し神秘的なところがあった。

そしてティヴァーシャルおよび人間の醜悪さは次の描写において最高頂に達する。

車はティヴァーシャルの長くむさくるしい街なみを縫って、岡を上っていった。黒ずんだ煉瓦の住宅があり、黒いスレート屋根がその鋭い端を光らせ、土は炭塵で黒くなり、舗道は湿って黒かった。まるで陰うつさがあらゆるものの底の底まで浸みとおっているようであった。自然の美の完全な否定、生の飲びの完全な否定、あらゆる鳥や獣にある、形よい美をもとめる本能の完全な欠如、人間の直感的能力の完全な死滅は慄然たるものであった。雑貨店に置かれた石けん山の食料品店に置かれた大黄やレモン！ 帽子屋のなんともいぬ帽子！ すべてが醜く醜く過ぎていった。そしてそのあとにつづいて、塗りたくってぞっとするような映画館とその濡れた映画の広告とがあった。「女の恋」。そして何の飾りもな

い煉瓦と、窓に緑色がかった黄いちご色の大きな窓ガラスとで、充分原始的な新しく大きな原始派の教会があった。高いメンジスト派の教会は黒ずんだ煉瓦づくりで、鉄製の手すりと思ふ黒ずんだ灌木の茂みのうしろに立っていた。他よりもすぐれていると思ふ組合教会派の教会は、田舎風の砂岩で出来ており、尖塔といえあまり高くないのがあった。すぐ向う側に新しい校舎があった。豪勢なピンク色の煉瓦づくりで、鉄の手すりの内側には砂利を敷いた運動場があり、すべてひじょうに堂々としていて、教会と刑務所を同時に連想させた。第五学年の少女たちが歌の練習をやっていた。ちようどラ・ミ・ド・ラの音階練習を終って、「美しい子供の歌」を始めるところであった。これ以上に歌らしくない、自発的な歌らしくない歌を想像することは出来ないであろう。奇妙なわめくような叫び声が、曲らしいものに伴うのであった。それは野蛮人のようではなかった。野蛮人には微妙なリズムがある。それは動物のようではなかった。動物が叫ぶ時にはなんらかの意味がある。それはこの地上の何のようでもなかった。しかもそれは歌と呼ばれていた。コニーはフィールド(Field)が石油を入れている間、坐って驚いて聴いていた。このような人々は一体どうなるのだろうか。その生きた直感的能力が釘のように死滅し、ただ奇妙な機械的な叫びと不気味な意思力とだけが残った人々は？……

ティヴァーシャル！これがティヴァーシャルなのであった。メリー・イングラント！シェイクスピアのイギリスなのであった。いや、コニーはそこに住むようになってから気づいたのだが、それは今日のイギリスであった。それは新しい人種を作りだしつつあった。金と社会的政治的の面には意識過剰で、自発的直感的な面では死滅している人種を。彼等のすべては半死人であった。しかし他の半面においては恐らく執拗な意識をもっていた。そのすべてには何か不気味で地下的なものがあった。それは下界であった。そして全く見当がつかねた。この半死人の反応をどう理解すればよいのだろうか。コニーは不気味でゆがんだ人間のような小さな存在である、鉄鋼所の労働者たちを満載した大きなトロッコが、シェフィールドからマトロックへと向うのを見て、その内臓が氣を失い、考えた。「ああ神よ、人間は人間に何をしたのか？人間の指導者たちはその同胞に何をなしつつあるのか？彼等は彼等を人間以下にしてしまった。そして今やもう友情はありえない！まさしくそれは悪夢だ。」^④

美しいシェイクスピア時代の英国は姿を消し、あるのは炭塵に汚れ、機械の音のひびくインダストリアル・イングランドであった。そしてそこに住む人間は真に生きる人間性を喪失し、金銭欲にとらわれ、機械の奴隷と化した半死人であった。これがロレンスの眼に映った故国の姿であり、同胞の姿だったのである。そして先述したようにラグビー邸には、この炭鉱町の機械の音が聞こえ、煙が吹きつけて来たのである。

クリフォード (Clifford) はコニーとの結婚後間もなく第一次世界大戦に従軍し、下半身麻痺の重傷を負うて帰って来る。彼は性的にはイムポテンツとなり、車椅子を操って毎日を過している。「彼はひじょうな傷を受けたので、彼の中の何物かが滅び、彼の感情のいくらかがなくなっていた。無感覚の空虚さがあつた。」コニーはそうした夫の面倒をよくみ、彼等の夫婦生活は外見上なにごともないかのように営まれていた。しかし二人の間には人間としての温い接触がまるでなかった。毎日の生活は何のとどこおりもなく進んでいるものの、「それを有機的に結びあわせる感情の温かさというものがなく、家は使われない通りのごとく荒涼としてみえた。」「コニーにはすべての素晴らしい言葉が、彼女の世代だけうち棄てられたかのように思えた。恋、歎び、幸福、家庭、母、父、夫、これらすべての素晴らしいダイナミックな言葉が今では半ば死に、一日一日と死んでゆきつつあつた。」クリフォードは作家として名声と富を得ながら、その心の中には「非人間的な戦争」による傷が深く深くひろがっていた。そして万事において、まるで幼児のようにコニーに依存していたのである。彼は結婚という形式さえ保たれれば、コニーが他の男の子供を生んでも、それをチャタリー家の相続人として育てようという。彼によれば、二人の結婚生活というもののだけが永続性のある大切なものであつて、恋愛や性の行為などは束の間のとるに足らぬものにすぎないのである。彼にとっては、クリフォード家という貴族の家名さえ継がれればよいのである。

コニーはミカエーリス (Michaelis) というアイルランド生まれの劇作家と一、二度情事を持つが、結局それも空

しいものにすぎない。眞の生命の充足が得られず、索漠たる空虚に悩む彼女は、生活に焦だちを感じ、自分の裸身を鏡に照らして、美しかった肉体が空しく衰えかけているように思う。そうした彼女の煩悶を手紙で知った姉のヒルダ (Hilda) はスコットランドからやって来て、クリフォードに適当な附添いをつけるか、さもなければ氣晴しにコニーをロンドンに出すことを要求する。この要求をいれてクリフォードは、夫を炭鉱で死なせたボルトン夫人 (Mrs. Bolton) という女を附添いとして迎える。ボルトン夫人の世話を受けるようになってから、クリフォードは子供のように彼女に頼り、身のまわり一切の世話を彼女に委せ、ひげをそらせたり、チェスを教えたりすることに一種の「権力意識」を感じるようになる。彼女はコニーにかわってタイプまで打つようになる。彼女にとって、この貴族であり高名な作家である彼の世話をすることは、身にあまる喜びであった。コニーは夫の世話から解放され、夕食が終るとすぐ二階の自室にひきあげるようになる。そうした彼女にとって唯一の避難場所はチャタリー家の森であった。

一方クリフォードはボルトン夫人の影響で、『恋する女たち』(Women in Love) のジナルド (Gerald Crichton) 同様、ティヴァーショナル炭鉱の復興にうちこみ、新しい炭鉱の研究に精を出し、そこに「新しい権力意識」を感じずるようになる。

そして彼はまさしく生まれかわったようにみえた。今こそ生活が訪れたのである。彼はコニーとの芸術家、そして意識的存在としての隔離された個人生活において、序々に死滅しつつあった。今こそそれらすべてを放てきしよう。眠らせよう。彼はただ石炭から、炭鉱から生命が彼にほとぼしり入ってくるのを感じた。炭鉱のひじょうにかびくさい空気が彼にあっては酸素よりもよかった。それは彼に権力意識を与えた。自分は何かをなしているのだ。自分は何かをなそうとしているのだ。自分は勝つ。そうだ勝とうとしているのだ。彼が小説によって、すべての精力と消耗のなかで得た、単なる名

声ではなかった。それは男の勝利であった。……

しかし今クリフォードは産業的活動の他の不気味さへと移りつつあった。固く有効な外皮と柔い内部をもった生物といつてよいもの、現代の産業的経済的世界の驚くべきかにかえびのひとつ、機械のように鋼鉄の殻と、柔いバルブのような肉体とをもった、甲殻類の無脊椎動物に^⑤。

この形容こそ、クリフォードのきわめてグロテスクで恐るべき非人間性を描くものではないか。彼こそまさしく現代の機械文明の不毛性を象徴するシムボリカルな人間である。車椅子に乗り、情緒的には妻や召使に子供のように依存する、バルブのようにぶよぶよした存在でありながら、意思的には鋼鉄のような権力意識で、炭鉱経営に狂奔する彼の姿こそ、現代の機械文明が生んだ害悪のシムボルに外ならなかった。ロレンスは『チャタリー夫人の恋人について』(A Propos of Lady Chatterley's Lover)の中でクリフォードの象徴性について次のように述べている。

そこで『チャタリー夫人の恋人』にはサー・クリフォードというひとりの男が出てくる。慣用のそれを除いて、男とも女とも全くすべての関係を失った、純粹に一個の人間だ。温かさというものはすべて消滅し、妒は冷え、人間的な心は存在しない。彼は純粹に我が文明がうんだ産物である。しかし彼は世界の偉大な人間性の死である。彼は原則として優しいが、温い共感の何たるかを知らない。彼は彼である。そして彼は自ら選んだ女を失なう。……

私は何度も私がわざとクリフォードを麻痺にさせたのか、それが象徴的であるかを聞かれてきた。そして文学上の友だちは言う。彼を完全にポテンツにしておいて、にもかかわらず女をして彼から去らしめる方がより良かったであろうと。シムボリズムが意図的なものであるかどうかについては、私は知らない。確かに最初クリフォードが創られた時はそうでなかった。私がクリフォードとコニーを創った時、私は彼等が何なのか、また何故彼等があるのかわからなかった。彼

等はただ凡そ今のままで出て来たのである。だがこの小説は初めから終りまで、三度書きなおされた。そして私が初稿を讀んだ時、私はクリフォードの不具は、今日の彼のような、彼の階級のほとんどの人々の、より深い情緒的麻痺を象徴するものであることを知った。私は手法上彼を麻痺にさせることは、コニーを不当に利用することになるだろうことに気づいた。彼女が彼を棄てることは、はるかに彼女を俗悪たらしめた。しかし小説はひとりでに現在のような形で現れた。そこで私はそのままにしておいた。我々がそれをシムボリズムと呼ぶと否とにかかわらず、それが起ったという意味で、それは不可避である。^⑥

しかもコニーはそれだけ自分が自由になれたわけではなかった。クリフォードは彼女に去られるのではないかと、神経質に恐れていた。彼はまるで野蛮人が偶像を崇拜するように彼女を崇拜した。ひとりの人間としては彼は馬鹿同然であった。彼女はそんな彼の妻として、チャタリー夫人として、ラグビー邸にいななければならなかったのである。彼女にとってこんな夫との生活は砂漠同然であった。

このような彼女にとって森は唯一の救いの場所であり、しばしば彼女は足を運ぶようになる。そして或る日夫から森番メラーズ (Oliver Mellors) を紹介される。彼は鉦夫の息子であるが教育も受け、インドへ従軍し、将校にまでなりながら、現代社会との接触を嫌い、森番の孤独を選んでいる男であり、時にひどいなまりの方言を話す。明らかに彼は『白孔雀』(The White Peacock) のアナブル (Annable) 以来、ロレンスにとっては反機械文明を象徴する人物である。

コニーは夫からメラーズへの伝言をつたえるため森へ行った時、小屋でメラーズが上半身はだかだか身体を洗っているのを垣間見、その「柔い光、一個の生命の温く白い焰」を見てショックを受ける。そうした或る日、彼女はメラーズが小屋の前で飼っているきじの雌鳥が、じっと卵を暖めているのを見、そこにのみ自分の心を暖める

ものがあるのを感じる。彼女は雌鳥が卵を暖める光景に、自分にはない温い肉体の接触、ラグビー邸とは対照的に、生命の生まれでる歓びを見たのである。彼女は来る日も来る日も雌鳥を見に、森へやって来るようになる。やがて雛が生まれ、雌鳥のまわりをよちよち歩くようになる。それは機械文明に毒されない一個の生命の誕生であり、歓びであった。同時にそれはコニーをして、自分の女としての孤独をひしひしと感ぜさせる光景でもあった。しやがんで可愛い雛を掌にのせた彼女の眼から、一筋の涙が流れおちる。それをうしろから見えていたメラーズは、彼女の孤独にたいする同情から、思わず彼女を抱きしめるのである。彼は彼女の「優しさ」(“tenderness”)をいとおしみ、彼女は彼がチャタリー夫人としてでなく、ひとりの女として愛してくれ、彼女が世界中の女のなかで一番すばらしい尻を持つ女だと言ったの喜ぶ。このロレンス最後の長篇小説においては、もはや男女の自我の対立も、互いに相手をうち負かそうとする争いもみられない。そこにはひとりの男とひとりの女とがやさしく互いの身体を暖めあう、やさしさが見られるのみである。ちなみに一九二八年三月四日附ロルフ・ガードナー(Rolf Gardiner)あての書簡のなかで、ロレンスは「今や指導者と従者といった問題はすべてどこか間違っているのではないかと思えます。……指導者意識が死滅した時……それは新しく変って、相互の優しさに基づいて生まれかわるでしょう」^⑧と力の主張が古いことを指摘し、一九二八年三月十三日附ウィッター・ビナー(Witter Byner)あての書簡でも、やはり指導者、従者といった関係は古く、「新しい関係は男対男、男対女のなんらかの感受性に富んだやさしさとなるでしょう」^⑨と述べ、一九二八年三月十五日附ハリエット・モンロー(Harriet Monroe)あての書簡でも「優しさと美、この二つこそ我々を恐怖から救うものでしょう」^⑩と述べている。ロレンスの考えかたが、いわゆるリーダーシップ・モデルズといわれる『エアロンの杖』(Aaron's Rod)、『カンガルー』(Kangaroo)、『翼ある蛇』(The Plumed Serpent)から大きく変わったことを示すものである。

そしてその優しさにこそ生命の燃焼があり、失われていた人間性の回復があった。コニーにとつては女としての肉体の復活があった。それまで人間らしい接触を持たなかった彼女に、はじめて人間らしい接触がよみがえったのである。砂漠のように乾ききり、炭塵にまみれていた現代の生活に、清らかな温い人間の血が通いはじめたのである。もっと後のある嵐の夜、二人がすっぱだかで雨の中を駆けまわり、裸のまま交りあい、互いの陰部にさまざまな花を飾る場面があるが、これなどは原初の昔のアダムとイヴの姿さえ連想させる。男と女とが裸かで血の交りをつぶこと、これこそロレンスが現代の機械文明の中にあつて真の人間性を回復する途と信じたことであつた。彼は次のように述べている。

そしてこれが性行為の意味である。この交り、古い言葉を使えば、ユーフラテス、ティグリスの二つの河がこのように接しあい、メソポタミアの土地を取囲み、そこには天国あるいはエデンの園があり、人間がはじめて生まれたこと。これが結婚である。この二つの河の巡回、この二つの血の流れの合流、これ以外の何でもない。すべての宗教が知っているように。

二つの血の河は夫と妻、二つの異つた永遠の流れであり、微妙な領界を犯すことなく、混乱し、ごたまぜになることなく、接しあい、交りあい、互いを新たにする力を持っている。そして男根こそ二つの河を結びあわせる結び目であり、二つの河を一つにし、その二重性から永遠にひとつの流れを作り出す。そしてこの生涯を通じて序々に二つにおいて仕上げられたひとつこそ、時あるいは永遠のなした最高の業績である。そこからすべての人間的なものが生じる。子供も美もよく作られた物事も。すべて人間性が真に創りあげたものが。そして我々が神の御意思について知っているすべては、神がこの、この合一が生涯にわたつて果され、実現することを、人間の偉大な二本の血の流れの中でのこの合一が実現することを、望んでおられるということだけである。^⑩

その意味でティヴァーシャル炭鉱や下半身麻痺したクリフォードが現代機械文明を象徴したのと同様、森やコニーとメラーズの交りは、生命の復活というシムポリカルな意味をもつといえる。

一方自分の家へ帰るメラーズの耳には、スタックス・ゲイト (Stacks Gate) 炭鉱の機械の音が聞こえてくる。

彼は森の闇と隔絶の中へふたたび下っていった。しかし彼は森の隔絶が幻想的なものであることを知っていた。産業の騒音がしじまを破り、眼に見えないけれど、鋭い光がそれを嘲っていた。人間はもはやひとり引きこもっているわけにはゆかなかつた。世間が隠者の存在を許さない。そして今彼はあの女と関係をもった。そして新しい苦しみと運命とを、自分にひっかぶった。何故なら彼は経験でそれが意味するものを知っていた。

女が悪いのでもなければ、恋が悪いのでも、セックスが悪いのでもなかった。悪いのはあそこの、あのいまわしい電灯とエンジンの悪魔的な騒音にあった。あそこの電灯で輝き、熱い金属を吹き出し、貨車で轟音をあげている、機械的に貪欲な、貪欲な機械主義、機械化された貪欲の世界には、膨大な悪が、従わないものは何でも破壊しようと待ちかまえている。間もなくそれは森を破壊するであろう。ブルー・ベルの花ももう出てこないであろう。傷つきやすいものはすべて鉄の蹂りに滅んでしまうであろう。^⑧

メラーズはこのような機械文明が二人を破滅させるまでは、コニーと自分を守ろうと決心する。どこか機械も人もいないところで、二人だけで住めたらと思う。

ところで更にもうひとつシムポリカルなエピソードがある。それはコニーと車椅子にのったクリフォードとがいっしょに森へ行く場面である。車椅子が容赦もなく、生えてている春の草花を押しつぶす。道々クリフォードは支配階級と労働者階級のあいだには厳然たる隔りがあり、我々は労働者を支配せねばならぬと主張する。途中

で車椅子が故障を起し、クリフォードはメラーズを呼びつけて直させようとするが、メラーズは機械は苦手で、直すことが出来ない。止むなくコンニーとメラーズがうしろから車椅子を押す。コンニーはこの時はじめて夫にたいし、はっきりと憎しみを感ずる。また或る日プリント(PIRE)家を訪ねたコンニーは、赤ん坊を見て羨しく思う。帰宅後その赤ん坊のために服を編んでいるコンニーにラシーヌ劇の朗読を聞かせるクリフォードの姿が、なんと温かみのない奇怪なものに見えることか。

こうして自己を取戻したコンニーは、クリフォードが宇宙は物理的には消滅しつつあるが、精神的には飛躍しつつあるという、ある書物の主張を説明するのにたいし、断固として「私には肉体を下さい。私は肉体の生命の方が知性の生命よりもより偉大な現実であると信じます。肉体が眞の生命に目ざめた時には、ところがひじょうに多くの人間は、あなたの有名な巻揚げ機のように、肉体的には死滅した死骸に、知性を結びつけているにすぎないのです」と反較する。また彼女は性にまつわる羞恥心を克服する。

この短い夏の夜彼女はひじょうに多くのことを学んだ。彼女は女は羞恥のため死ぬだろうと思ったことだろう。ではなくて羞恥心はなくなった。羞恥。それは恐れである。深い有機的な羞恥、我々の肉体の根元にうずくまり、感覚的焰によってのみ追いはらうことの出来る、古い古い肉体的な恐れ、とうとうそれが男の男根的追求によってかき立てられ、追いだされ、彼女は自分というジャングルの最奥部に達した。今や彼女は自分の本性の土台石に達し、本質的に羞恥心がないのを感じた。彼女はその感覚的自己であり、裸かで羞恥がなかった。彼女は勝利を、ほとんど自惚を感じた。そうだ。それが現実の姿なのだ！それが生きるといふことなのだ！それが人間の現実なのだ！隠したり、恥しがることは何もなかった。彼女は別の存在である男と、究極的な裸かを分けもった。^④

彼女にとって性は「自然で活力にみちたもの」であった。今彼女の考えるのはクリフォードと離婚して、メラーズと二人だけのあの生命にあふれた「真の生活」を持つことだけである。

小説の終りちかく、コニーは父のサー・マルコム(Sir Malcolm)と姉のヒルダとヴェニスへ旅行をする。途中立寄ったロンドンもバリも生活は索漠とし、この世はついにアナキーになるのではないかと彼女は感ずる。ヨーロッパの景色にも人間にも失望した彼女は、むしろラグビーへ帰りたいとさえ思う。そうした時彼女はクリフォードからの手紙で、メラーズの別居していた妻が戻ってきて、メラーズが女を家に入れていと村中にふれまわったスキャンダルのため、メラーズが森番を辞めねばならなかったことを知らされる。コニーは父にすべてを打明け、ヒルダの意見によって、妊娠中の子供は友人の画家ダンカン・フォーブス(Duncan Forbes)の子供だということにし、クリフォードに離婚を求める手紙を書く。ところがクリフォードがダンカンとの情事を認めようとしないので、彼女はついに真実を打明ける。クリフォードは怒って頑固に離婚はせぬと言いはるが、メラーズはミッドランドの農場で働くことになり、コニーはスコットランドで、それぞれいっしょに住める日が来るのを待つことにする。

最後にロレンスは一九二八年三月五日附マーティン・セッカー(Martin Seeker)あての書簡でこの作品に触れ、「これはちょっとした革命、ちょっとした爆弾です」と述べ、また一九二八年三月十五日附ハリエット・モンローあての書簡で「しかし、いずれにせよあなたはこれが全くまじめなもので、私が我々の生活に他の、男根的意識を回復することをまじめに信じていることを御存知でしょう。何故ならそれがすべての真の美、すべての真の高貴さの源だからです」と述べている。この小説をポルノ扱いすることが如何に愚かであるかを、明白に示すものといえよう。

